

# S21 《越境建築家》たちとの対話

～「越境」が建築家にもたらすもの～

開催日時：2025年11月7日（金） 16:00～17:30

会場：千葉県文化会館・大練習室

登壇者：井本佐保里 研究者／

日本女子大学建築デザイン学部建築デザイン学科准教授

後藤克史 建築家／Squareworks LLP 主宰

山道拓人 建築家／ツバメアーキテクト代表取締役／

法政大学デザイン工学部建築学科准教授

早野洋介 建築家／MAD Architects 共同主宰

坂田泉 建築家／JIA 国際委員長／OSA ジャパン

REPORTER



藤本 千廣  
(千葉工業大学大学院 修士1年)



当日の会場の様子。会場には幅広い年齢層の聴衆が集まった。



坂田さんの司会のもと、登壇者が自身の越境体験について語った。

上段左：坂田さん 上段右：井本さん  
中段左：後藤さん 中段右：山道さん  
下段左：早野さん

## 1. 企画の意図

本企画では、国境そして建築家としての職能、職域を超えて世界で活動をしている《越境建築家》によるトークセッションが行われた。《越境建築家》たちは、越境することによって何をもたらし、そして何をもたらされたのかを考えた。

## 2. トークセッションの概要

グローバル化が加速した現代において、国境・文化・職能といった境界を超えて活動する建築家や研究者たちは、現地の人々との関係性を築きながら実践を行っている。本セッションは、ケニアで土についての研究活動をしている司会の坂田泉さんのもと、4人の登壇者によって進められた。坂田さんの「現在行っている活動において、どのような業種や職能を超えて関わっているのか。そして越境することで自身が何をもたらし、また何をもたらされたのか」という問いに回答するかたちで議論は展開された。

まずは登壇者がそれぞれの活動を紹介した。

井本佐保里さんは、ケニアのスラムへと越境した研究者だ。インフォーマル居住地で住民と共に学校のセルフビルドなどを実践してきた。しかし、その学校は再開発計画によって撤去されてしまう。そこで、屋根を掛けるなど、柔軟性の高いセルフビルドを行い、スラムの政治的・社会的状況に応じた設計を実践した。研究者としての専門領域から現場という非専門的職域へ越境するとともに、教育の境界や権利をも横断する取り組みが特徴的である。

インドを拠点に活動する建築家の後藤克史さんは、3つのプロジェクトを通して自身の越境経験を紹介した。1つ目は、地域分散型インフラであるバイオフィルターの開発で、NGOや地元企業との協働により、建築家が担うインフラ設計の限界を越えた実践を行った。2つ目のマーケットのプロジェクトでは、限られた予算で緩やかな公共空間をつくるために屋根をかけるという設計を行った。このプロジェクトを通して学んだこととして、施設を与えるだけでは住民が使わないことも多く、ユーザー側のキャパシティを考慮した設計が重要だと考えていると述べている。3つ目は、プロセスを重視したアーティスト・イン・レジデンスの開催について。参加者にプロンプトを与え、それについての制作を行う。そして参加者がワークショップで制作した作品たちを南ムンバイのオープンスタジオで展示するという取り組みを紹介した。

ツバメアーキテクトの山道拓人さんは、博士課程時代にシェアオフィスの運営や設計、ベンチャー支援など幅広い職能を横断して活動してきた。近年では北沢で、かつて使われていた線路敷地を若い世代が改造しながら暮らすプロジェクトに取り組み、庇や外壁のルールづくりや、改造しやすいディテールの設計を行った。そのように仕組みや、ある程度のルールをつ



トークセッションの様子。

くることによって、建築の知識をもたないユーザーが自ら空間をつくることを可能にし、非専門家と建築をつなぐ橋渡し役を果たしている。

MAD Architectsの早野洋介さんは、「越境した」という感覚よりも、漂うように北京へたどり着いたと述べ、文化や言語の違いを抱えながら他者と協働する姿勢を語った。多様な文化背景を持つスタッフや社会と関わりながら、違和感を内包したまま建築設計に取り組んでいる。

4人のプレゼンテーションが終わり、坂田さんは「領域横断によって何が自身にもたらされたのか」という点に議論を向けた。

早野さんは、越境する際には自分が開かなければならないと述べた。言語や育った環境の違いからお互いを完全に理解することは難しい。そこで生まれる行間を自身の想像力で埋め、違和感を内包しながら関わっていくことが大事である。そして仕事をしていく中で、建築においても違和感を感じるという。日本の建築は緻密であるが、中国の建築は解像度が荒いもののおおらかであるという特徴を持つ。その違いをなんとか融合できないかということに興味があるという。

これらの実践に共通して見られるのは、自身および関わる相手の立場を固定化せず、関係性をあえて“ルーズ”に保つ姿勢である。関係の解像度を荒くし、柔軟に関わることで、新たな協働の可能性を生み出している。登壇者の多くに見られる姿勢として、デザインする側と使用する側を分離せず、共に空間をつくり上げることや、改築・再構築を積極的に受け入れるといった取り組みが挙げられる。これにより、建築家という職能の枠を越えた実践が実現している。

彼らの活動は、言語や文化、職能、さらには法律や固定観念さえも越えて展開されている。越境する建築家には、異なる文化や言語を完全に理解できなくとも、他者と関わり続ける姿勢と覚悟が見られる。

越境とは、人と力を集める行為であると坂田さんが述べられたのが印象的であった。

### 3. 当日の質疑応答

「越境の中で、使う人とデザインする人の立場が重なり合っている様子が良い。あえて両者を分けないというスタンスなのか」という問いが投げかけられた。

これに対し、早野さんは、大規模なプロジェクトでは多様な文化的背景を持つ人々と関わることになるため、大切なビジョンを見失わないことが重要だと述べた。その一方で、細部まで理解し合おうとするのではなく、あえて関係の解像度を荒く保ちながら関わることで、違いを内包した協働が可能になると語った。

また後藤さんは、自身はあくまで施主を支える立場であり、主体は常に施主側にあるという意識を持って設計に向き合っているという。質疑応答を通して、越境的な実践においては、立場を固定せず、それぞれの役割を柔軟に捉える姿勢が重要であることが改めて示された。

### 4. まとめ

私はこのセッションに参加して、越境とは特別な場所へ行ったり、大きな行動を起こしたりすることだけではなく、自分の立場や専門を絶対的なものとせず、他者との関係の中で揺らし続ける姿勢そのものなのだと感じた。登壇者たちは、建築家としての成果だけでなく、関わる人々との関わり方や、そのプロセスを大切にしていた。その姿勢から、建築は一人で完結する行為ではなく、人と人との関係の中で生まれるものだと改めて感じた。また、違和感やわからなさをすぐに解消しようと思わず、それらを抱えたまま関わり続ける姿勢が印象に残った。越境とは、境界を消すことではなく、違いがあることを前提としたうえで、それでも関係を結び続ける行為なのだと感じた。